

高等学校国語科採点基準

3枚のうち1

【注意】問題によっては、部分点を可とする。

問題番号	正 答	採 点 上 の 注 意	配 点
問一	2		3
問二	1		3
問三	4		3
問四	3		4
問五	2		6
問六	くどくど説明する必要がなく、要点だけをかいつまんで述べるだけで誤解も生じず、お互いが熟知し合った集団の内部においては敬遠されるような表現の代表的な例。(75字)	内容を正しく捉えていれば、表現は異なってもよい。	6
問七	海綿状に発達した言語においては、受け手に強い連想作用が具わっており、軽く間接的で象徴的な表現がよく利くため、直接的でつよい表現は受け手に重苦しいものとして感じられてしまうから。	内容を正しく捉えていれば、表現は異なってもよい。	10
問八	筆者の述べる「あいまいな表現で伝える論理」とは、親密な者同士の伝達で用いられる点的論理であり、言葉の連想領域が大きく語義が広範囲に及ぶ上に、潜在する論理が下敷きとなっているため、話の筋道が明白でなく解釈の余地が大きく、間接的な表現が効果的であり、表現の余韻や含蓄などが重視される論理である。 この筆者の主張を踏まえると、【資料】の俳句における、「彼一語我一語」と「秋深みかも」という一見無関係と思われる語句を組み合わせることで秋の静寂な情景を連想させることに、筆者の述べる「あいまいな表現で伝える論理」が隠れていると考える。たとえば、【資料】には「「彼」と「我」がそれぞれ発した「一語」がどういう言葉だったのかも、わからない」「言うに言われぬ時が流れて、二人の男も、発した言葉も、深い秋のまっただなかにある」とある。俳句には、「一語」の内容も秋の深まりを感じた理由も示されていない。しかし、読者は二人の男も、発した言葉も、深い秋のまっただなかにあるという情景を思い浮かべることができる。これは、「一語」がきっかけとなり秋の深まりを実感していると推測できるとともに、「一語」の森閑とした響きから秋の静寂さを連想できるからである。これらについて、【資料】には「それゆえにこの句の世界は成り立っているという逆説的な性格がこの句にはある」とある。 これは、筆者の述べる「あいまいな表現で伝える論理は複線で、また、いたるところで点線状になっている」「点的論理の視点からすればきわめて興味あるものになる」という主張に当てはまると考えられる。	問いを正しく捉えていれば、内容は異なってもよい。	20
問九	㉞ こうなん ㉟ 摩擦 ㊱ 媒介 ㊲ やば ㊳ かん	語として採点する。	各2×5

65

高等学校国語科採点基準

3枚のうち2

【注意】問題によっては、部分点を可とする。

問題番号		正 答	〔例〕	採 点 上 の 注 意	配 点
二	問一	3			3
	問二	4			3
	問三	1			3
	問四	2、5		二つとも合っているものだけを正答とする。	4
	問五	A	私一人であるならば、気も楽であろうに	内容を正しく捉えていれば、表現は異なってもよい。	各 5 × 2
		B	仏も不憫に思ってお聞き届けくださっただろうよ		
	問六	東国に下った父親が今どのあたりにいるのだろうかということ。 (29字)		内容を正しく捉えていれば、表現は異なってもよい。	6
三	問七	娘を遠い京に残して東国に来ている中、風光明媚な場所に出会い、娘に見せてやれないことを残念だと思っていると、そこが「子しのびの森」と呼ばれていることを知り、「子しのびの森」と、娘が気がかりである今の自分が同じであると思ったから。		内容を正しく捉えていれば、表現は異なってもよい。	10
	問一	3			3
	問二	2			3
	問三	4			3
	問四	2			3
	問五	X	王は陳軫を秦に行かせた	内容を正しく捉えていれば、表現は異なってもよい。	各 5 × 2
		Y	そのため、あなたは私を見捨てて楚王に仕えてしまった		
	問六	斉と楚とが争う中で戦いに加わるかどうかを陳軫に諮った秦王に対し、陳軫は楚の国を討つことは得策ではないという提案を行い、国を持続させるためには、王として計略を立て、献策に耳を傾ける姿勢が重要であると説き、秦王の依頼に応えるとともに、楚の国を守ろうと考えたから。		内容を正しく捉えていれば、表現は異なってもよい。	12
四	問一	3			6
	問二	1			6

高等学校国語科採点基準

3枚のうち3

【注意】問題によっては、部分点を可とする。

問題番号	正 答 [例]	採 点 上 の 注 意	配 点
五	この随筆と漢詩とを合わせて読むことにより、筆者の心情を具体的に解釈することができる。 たとえば、漢詩の「日は三春に似て永く」「心は野水に随って空し」という二句は、随筆から読み取れる病床にある筆者の様子を踏まえて読むことで、筆者の病による憂鬱な心情を表現していると解釈できる。随筆に書かれている、「秋草の淋しさを物憂く思い出した」という心情表現や、「野生の秋草」や「蜀江葵」、「薄」「女郎花」「コスモス」などの草花に関する「色彩の極めて乏しい」「色素が足りなかった」「色の褪めた茄子の色」といった、植物の枯れた色合いを示す表現と、漢詩の「床頭花一片」「閑に落つ小眠の中」の二句とを関連付けることで、筆者が、病床で寂寥感や深い孤独を感じていることが伺える。また、花に関する描写には比喻表現が多用されており、筆者が病床において植物を詳細に観察している様子とともに、植物が病の不安を慰める存在であったことを読み取ることができる。 さらに、漢詩の「空し」や「閑に落つ」という表現と、随筆の「或日しんとした真昼」に窓から見える景色の描写、「縮れた」「散ってしまった」という植物の枯れていく様子が繰り返し表現されていることを合わせて解釈することで、病気であるが故に、植物の衰えていく様子に敏感になっている筆者の状況が分かり、その敏感になっている筆者の姿から、将来を憂慮する筆者の心情が想起され、漢詩の「空し」い気持ちを具体的に感じ取ることができると考えられる。	問いを正しく捉えていれば、内容は異なっていてよい。	50